人間脱退

メガッテン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人間脱退

【Ｎコード】
Ｎ１６２３ＢＡ

【作者名】
メガッテン

【あらすじ】
――地球で罪を犯し処刑された男が死にきれずに孤独なお姫様によって召喚され、呪われた武器でハーレムを作り、孤独なお姫様の復讐と成り上がりを手伝うダークファンタジー――
※酷い厨要素・チートが含まれます

第1話：それぞれの今と状況、そして出会いと別れ。（前書き）

初めまして、メガッテンと申します。

これが初めての投稿になりますので至らぬ所もございますが、もしよろしければお読み下さい。

第1話：それぞれの今と状況、そして出会いと別れ。

■■？？？■■

「受刑者番号００４４柳小次郎（やなぎこじろう）。貴殿の入室を許可する」

石造りの巨大な部屋の中にしわがれた老人の声が響き渡り、その後に入口の方から誰かが歩いて来る音が聞こえる。

少しの間部屋の中には誰かが歩く音以外は聞こえて来なくなった。

そして老人の前に一人の男が立つのと同時に部屋は完全に静寂に包まれる

……暫く静寂が続いたあと、それを打ち消す様に老人が声を出す

「…受刑者番号００４４柳小次郎（やなぎこじろう）！貴殿が犯して来た今までの罪は決して許されるものではない！然るべきは貴殿の命で貴殿が犯した罪の重さを理解し、地獄で罪を悔い、輪廻の果てまで苦しむがいい！！…これより罪人の死刑を始める。せめてもの情けだ、神父の詩を聞きながら逝くといい」

老人が男に向かって捲し上げた

そしてその男はというと

「いや結構です。おっさんの詩なんていらないんで」

「…なに？」

口の端を歪め

「聞こえなかったか？頭が可笑しいおっさんの気持ち悪い歌なんかいらないって言ったんだ。頭だけじゃなく耳もボケてんのか粕爺が」

まるで老人を馬鹿にするように…いや馬鹿にしながら肩をすくめ老人に向け言葉を発した……

そして

「ていうかゴタゴタ言ってねぇで殺るなら殺るで早くしろよ粕。人生の最後にじじぃの声なんか聞きたかねぇんだよ。その残り少ない髪の毛全部むしってケツの毛埋め込んじまうぜホント」

まるで早く殺してくれと言わんばかりの発言

この発言を受け、プライドの高い老人は

「っ！！貴様はぁっ！良かろう、そこまで言うなら今すぐ殺してやる！執行人よ！すぐにこやつの首を跳ねるのだっ！」

と唾を撒き散らしながら叫ぶ

それから直ぐに鎌のようなものを片手で持ち全身を真っ黒のローブで身を包んだ大柄の恐らくは男であろう人物が、柳と呼ばれた男に近づき男の頭を足の裏で押さえ付けちょうど首の部分に刃の内側を置く

「最後に遺言でも聞いてやるぞ屑め」

さっきの仕返しと言わんばかりに、にやけながら柳に問う老人

「ありがたいねぇ……それじゃあ耳の穴かっぽじってよぉく聞いて置けよ粕共」

老人の嫌味に気を向ける事なく男は、二〇年という短い人生の最後の言葉を放つ……

「今ここにいる全ての者よ聞きやがれ！」

心から叫ぶ

「俺は今まで自分がやって来た事に全く後悔はしていない！」

再び部屋は静寂に包まれ柳の声だけが響き渡る

「だから俺は笑って死んでやるぜ！俺が生きてきた人生を最後まで俺であるために！」

息を吸い込み

「じゃあな粕共。お前らのこれからが絶望で染まるように地獄の底から祈っててやるよ」

柳は笑う

「殺せぇぇっ！！」

そして執行人が足を押し込み鎌を上に振り上げた……

神父は語る

それは確かに男が二〇年生きてきた中で最高の笑顔だったと

――――

この日、世界を恐怖のどん底に叩き落とした猟奇的大量殺人者――

柳小次郎（やなぎこじろう）は誰にも知られていないある刑務所の奥で心底嬉しそうに笑いながら、首を跳ねられたという……

■■said out■■

■■???■■

鬱蒼と生い茂る巨大な森の中、馬にまたがり鎧の様な物を着こんだ男達を月が照らしていた……

「いいかお前らぁ！端から端までくまなく探せよぉ！奴さんは裸足で逃げてやがる！そう遠くには行ってねぇはずだからよぉ！」

『はっ！』

男達の中で一人だけ鎧の色が違う巨大な棒状の物を背負った男が命令を飛ばし、他の者達が短く返事を返す
どうやら男達は人を探しているようだ

しかし

命令を受けた男達は気が抜けているのかダラダラと気だるそうに探し始める

そんな男達を見て

「あぁそれとなぁ……奴さんを捕まえた奴にはよぉ俺の奴隷の中で

一番の別嬪さんをくれてやるからよぉ。早いもん勝ちだぜぇ」と命令を出した男が付け加えた

するとその言葉に男達の目の色が変わり、直ぐに我先にと馬を蹴り森の奥へ消えていった……

そんな男達を見て

「どいつもこいつも馬鹿ばっかだなぁ……」

と心底つまらなそうに呟き溜め息をつく

だがすぐに表情を変え

「まぁゴミはゴミでもいないよりかはマシだろうしなぁ……邪魔したら殺すけどぉ。さぁて姫さんよ……俺から逃げ切れるかなぁ？ひゃひゃひゃ、すぐには壊さねぇぜぇ…せっかくの鬼ごっこなんだぁ…楽しませてくれぇぉ…あひゃひゃひゃひゃひゃ！」

と口の端を楽しそうに歪め、狂った様に一人で笑うのだった――

■■said out■■

■■said小次郎■■

（あれ？あれれ？確か俺って死んだよな？）

周りが一面白色で統一されている空間でさ迷い？ながら俺は考えていた

（うん確実に死んだよ。首チョンパされて生きてるはず無いもん）

確かにあの時はいけ好かない糞じじぃによって殺されたはず

※殺したのは執行人です

ならなんで……

（あれか？幽霊的な奴か？だったら今は地獄に向かってんのかな？）

いくら考えても分からない

なら考えなければいいんだ

うんそうしよう

（結論が出たのはいいけど暇すぎるよ……あぁ……）

なんか体はあるような気もするけど無いような気もする

（不思議な感覚だなぁ。眠くもならないし腹も減らねぇ）

初めは新しい感覚にワクワクしていたが時間がたつとやはり飽きてくる

だったら今から行く所の事でも考えようかそうしよう

（でも俺が行く方は確実に地獄だろうし……考えるだけで鬱になる……地獄ってどんな所なんだろう…閻魔様って男かな？それとも女？どっちでもいいから解剖してぇ）

ていうか俺は閻魔様に勝てるかなぁ？もし勝てたら天国に移すように脅し……頼んでみよっと

などと、どこか間違っている気がするが本人は気づいていないので今は放って置いた方がいいだろう

それから暫く時間が進み

頭の中？で閻魔の野郎を二回ほどボコした時であった

（ん？…なんだあれ？筒？ホースか？）

今までずっと一緒の景色しか無かったのに突然目？の前に先が丸く細長いホースのような物体が現れたのだ

（どういう事やねん……あれか？あれが地獄の入口なのか？）

だとしたらなんというショボさなのだろう

想像していた地獄の入口は小次郎の頭の中で消えていった

（入口があんなショボいんだったら案外閻魔も雑魚かもしれん……だとしたらもう天国行き決定じゃん！よしっ！ハッハァ！やったぜ！）

そう考えテンションがどんどん上がっている時それは起こった……

（まず天国に行ったら天使を家畜にして神様を裏から操って天国を裏からしは……ちょ…え…あれなんか光ってね？）

初めは小さな光だった

だが光はどんどん強まり終いには

（目があぁ！目がああぁ！）

目が開けられなくなるほど強くなった

しかもそれだけではない

（なに？やめて！引っ張られるよぉ！心の準備が！ＶＳ闇魔シミュレーションがまだ終わってないのに！）

轟音をあげ、光を発し、小次郎を吸い込もうとする謎のホース

（ええいままよ！こうなったら扉を開けた瞬間スグに闇魔に飛び交ってタコ殴りにしてやる！）

そして小次郎は謎のホースの中へ消えて行ったのだった――

■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■

■■？？？■■

私は走っていた

今までの人生の中で一番速く、一番長い距離を走っていた

既にヒールの踵の部分は折れていて、値段がつけられない位高いドレスは泥と魔獣の糞で汚れ、至る所に穴が空き解れていた

でもそんな事はもうどうでもいい

あの国から逃げられるならこんな物いくらだって捨ててやる

（もうすぐで国境を越えられるっ。あとちょっと……あと少しで……）

地元の者達からは【死臭の森】と呼ばれ高ランクの魔獣達が当たり前の様に彷徨いている森の中を私は走っていた――――

「はぁっはぁっ…少し…少しだけ休もう」

一晩中慣れない道を走っていたせいか流石に体が休息を、のどが飲み物を欲している

（何処かに川か池でもあればなぁ……）

そんな事を思いながら齢百年は超えているであろう死船花の木の空洞に隠れる

それにしてもさっきから、のどが経験した事の無いくらいに乾いている

（でも我慢しないと）

今動けばあいつらに見つかる可能性が高い

とりあえずあと少ししたらまた走らないと

そう心に決めた時だった

ガサッ

（っ！なに！？まさかもう追い付かれたの！）

近くで何かが草を踏む音

音は段々とこっちに近付いてきており

明らかに私を探している

（お願いっ！やっとここまで！やっとここまで逃げれたの！だから

お願い！）

心の中で必死に祈る

その間も、自分の心臓の音で気付かれるんじゃないかと思うほど体

が緊張し、血が流れる程掌を握りしめていた

（お母様……お願いします！私を守って！お母様っ！）

掌の中には今は亡き最愛の母から貰った東洋のお守りが握られていた

……その思いが通じたのか音は私から離れていく……

「ふぅ…」

（あぁ……良かった…ありがとうございますお母様）

……安堵からか自然に口から息が漏れていた……

それがいけなかった

「よおっ姫さん。会いたかったぜぇ」

いきなりの声

あの国にいたときはいつも嫌と言うほど聞いていたあの声

最悪の展開

最後の最後でやらかしてしまった失敗

よりにもよってこの男に見つかるとは……

「いやぁ危なかった。もうちょっとで森を越えられる所だったよぉ」

ニヤリと口を歪め楽しそうに言う男――ダウン帝国特殊殲滅部隊【破邪の槍】・副隊長―アガレス＝ドリフタン。その人であった――

――

（最悪だっ！まさかこいつに見つかるとは！）

頭の中は既に混乱しており、必死に逃げ道を探しだそうとしている

そんな私を嘲笑うかのようにアガレスは楽しそうに言う

「逃げ道なんてないよぉ。だって姫さん自分から檻に入ってくれるんだもん。手間が省けたんだぁ～ありがとねぇ」今の状況を表すと

休憩しようとし私が隠れた場所は死船花の木の空洞の中

唯一の出入口にはアガレスが立っている

（考えなさいっ！どうにかしてこいつから逃げる方法を！）

新しい出口を作る

どうやって？

手で木に穴を空けて……

無理に決まってる！

こいつを倒す？

ダウン帝国屈指の猛者であるあのアガレスを？

あり得ない！武器も無いし、魔法も今は使えない！

考えが浮かんでは消え浮かんでは消え……

その様子を可笑しそうに楽しそうに見ている目の前の男

悔しかった。私に力があれば！こんな男！こんな屑みたいな男なんかっ

しかし無いものをねだっても仕方がない

（諦める？ここまで来て？…冗談じゃない！諦めるぐらいなら死んだ方がマシよ！）

…死んだ方が…

（ちょっと待って……確か昔、私の護衛をしてた奴がこいつに殺されてたわよね……）

思い出すあの時の事を

（そうだわっ！こいつも私が死んだら上の奴らに殺されるかもしれない！……いや望みは薄いか……でも…それでも今はこれにかけるしかないのっ）

――アガレスを前にした私は冷静さを失い、愚かにも自分で絶望の中に飛び込んだのだ――

「そこを退きなさい」

「そう言われて退くとお思いで？」

「退かないと舌を噛みきって死んでやるわ」

お願いっ…お願いだから！

「ほぅ舌をねぇ……姫さん本気ですかぃ？」

食いついたっ！

「えぇ、本気よ。あいつの元に戻るくらいなら死んだほうがまし」

「……」

アガレスは黙り込む

お願いっ！退いてっ！お願いっ

顔には出さない様に悟られない様に

そして、ついに

「……分かりやした、とりあえず今は退いときますよぉ。姫さんに死なれたら俺が隊長に殺されちまう」

祈りが通じたのかアガレスが一歩引き下がる

だが次の瞬間、見えていた希望が姿をけした――

（よしっ！とりあえずはここから出て）

「とでも言うとぉ思ったかぁ？」

「…え」今……なんて

「本気で俺がぁお前の話を信じてぇ！ここから退くと思ってんのかってぇ聞いたんだよぉこの糞アマァ！」

声を荒げながら私の髪を鷲掴みにし、木の中から引っ張りだす

「っきゃっ」

突然の事でバランスを崩し、前のめりに倒れてしまう

そしてその直後横腹に走る痛み

「っつ！」

アガレスが倒れた私の事を仰向けにし自分の両足で私の両手を押さえ付ける

「馬鹿なお前によぉ、特別に全部教えてやるよぉ！ひゃひゃひゃっ！……まず第一にぃお前はなぁ舌を噛みきる事なんかなぁ、絶対に出来ないんだよぉ！」
アガレスは背に背負った自分の身の丈以上もある赤黒い大槍を引き抜きながら下にいる私に向かって得意げに説明しだす

私はその禍々しい槍を見た瞬間震えが止まらなくなりアガレスという男に心の底から恐怖してしまう

「何故だか分かるかぁ？知りたいかぁ？簡単なんだぜぇ実はぁ……」

目を見開き口を楽しそうに歪め唾を撒き散らしながら、話し続ける

「皇帝はなぁ、初めてお前と会った時になぁ、お前に自害止めの呪いと相殺の呪いを同時にかけたんだよぉ！お前が馬鹿な事を考えない様にねぇ…もう分かるだろぅ？お前はなぁ自分じゃあ死ねないん

だよぉ！皇帝に殺されるかぁ病気にでもかかるかぁしないとなぁ一生死ねないんだよぉ」
初めて知った真実
知りたくも無かった現実

自分じゃ死ねない？
死にたいと思った時にはあの男に頼むしかない？もしあの男が拒否したら？死にたいと思うほどの目にあっても死ねず、一番憎い相手に殺してと願うしかない？

「そ……んな…じゃあ……わた…わたしは……」

もう心が持ちそうになかった

だがアガレスはまだ私を壊したりないのか話すのをやめない

「しかぁもぉ！今回のお前のぉ逃亡はなぁ……」

やめて
その先はもう聞きたくない

しかし両手はアガレスに踏まれており、耳も防げない

体中も疲れからか上手く動かない

「皇帝がぁそうなるようにぃ仕向けたぁんだよぉ！何故だかぁわかるかぁ？皇帝は俺にぃこう言ったんだよぉ！お前のぉ心と体を同時に壊せってぇなぁ！そうぅすればぁお前はぁ廃人同然なぁ訳でぇ皇

帝専用のぉ性奴隷がぁ完成するってぇ寸法なんだぁぜぇ！」

いや

「あぁ大丈夫だぁぜぇ、セシアぁ侵略の話しはぁ本当ぃだからぁ！だから」

い……や

「安心して壊れろよ」

その瞬間、全てが砕けた

■■said out■■

■■said アガレス■■

笑いが止まらない

何時何度見てもいい……女が絶望する様は……特に強気な女やプライドが高い女が砕ける瞬間は見てるだけでイキソウになる……

この女もそうだ

セシアの王族だったこいつはダウンの皇帝に目をつけられた

確かにこいつは俺が見てきた女の中でずば抜けて美人だ

世界中から女を集めてもこいつには適わないだろうよ

出来る事なら俺の奴隷に是非ともしたいが、皇帝を怒らせるのは勘弁だ

（さぁて先ずは心が砕けたなぁ……次は体を壊そう）

今回の皇帝の計画は特にえげつなかった

女を手に入れる為にまずセシアで反乱を起こさせて王族と女の婚約者を皆殺しにし、女を手に入れる次いでに国力を落とす

そしてダウンが力をつけた時にセシアを頂くという馬鹿みたいに正直な計画だ

昔のセシアはこの大陸の中で一番国力があると言われる程の国だった

それは前王が今までの奴らとは比べ物にならないくらい優秀だったからだと言われている

そんなとんでもない奴の娘に惚れちまったダウンの皇帝はとにかく強欲だった

一度欲しいと思ったら絶対に何が何でも手に入れる……そんな男だ

だがどれだけ強欲で優れていた皇帝でも、流石に一人の女の為に国を滅ぼす訳にはいかなかった

でも諦めきれない

この女は俺の物なんだと

必死に考え情報を集める

そして遂に完成した計画

それがセシアの内乱だって訳

どんなに賢くてもどんだけ優秀な奴でも全ての人間の心は把握仕切れない

セシア王も、もちろんそうだ

だから信用していた一番の側近に裏切られたった一人の娘以外全てを失った

地位も家族も、自分の命までも失った

そして今セシアの王の座にいるのは裏切った側近だったりする

（全て皇帝の計画通り……見事にセシアは落ちぶれ、その間にダウンは力を着けた）

もはやセシアなんぞ何時でも落とせる

だが皇帝はそれだけでは満足できない

（セシアと同時に女も完全に自分の物にする……でも女は皇帝に惚れる事も愛する事も尽くす事もない）

なら邪魔になる感情と心を壊せばいい

自分に従順な奉仕するだけの生きた人形
（その為にわざと女にセシア侵略の情報を流しわざと逃亡させ、希望を見つけたと思っているその瞬間に）
全てを壊す
その為の俺だ
（まぁ長々と説明したがつまりは女はただ、皇帝の掌の上で踊らされていただけだって事）
それじゃあさっさと女を人形にするとしよう
――先ずは腕から壊そうか――
■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■
■■ｓａｉｄ　？？？■■
私は今絶望の中にいた
私の体を上から踏みつけ、巨大な禍々しい槍を持ち今の私を見るのが本当に楽しいのか顔を幸せそうに歪めている男――アガレス
こいつが　　憎い

こいつを　　殺したい
あいつと一緒に、私から全てを奪ったあいつと一緒に殺してやりたい
でも
（もう無理だよお母様……頭ではわかっている……けど……心が…体が……）
こわれちゃったの
自然と涙が溢れだす
悔しい、こんな奴に
（涙なんかみせたくない）
その願いが叶う事はない
「ひひ！ひひひゃひゃ！最高にきもぢいぃ！」
アガレスが何かを叫んでいるがわからない
「さてと、存分にぃ楽しんだしぃ本番だぁ」
遂に終わるのか？
いや始まるのだろう

地獄の日々が
あいつの奴隷として生きる日々が
頭にはあいつの顔が浮かび上がる
一番憎いあいつの顔が
その時だった
右手に感じる何か暖かい感触
昔を思い出すような温もり
（これは……お母様の……）
ずっと握っていた筈なのに今まで忘れていた手の中のお守り
アガレスに倒されても、踏まれても何を言われても離さなかったお守り
（お母様……私に……力を下さい……）
今は亡き最愛の母に祈る
――アガレスを殺す力を――あいつを殺す力を――私を待ってくれているセシアの民を守る力を――
（お母様……お父様……私は非力です…一人では何も出来ずに、今もただ壊されるのを待ちながら泣いています）

それは懺悔だった
愚かな自分を忌ましめるように
間抜けな自分を呪う様に
（でも……まだ諦めた訳じゃないっ）
壊れていた心が治っていく
偉大なる王と王妃を両親に持つ私
だけど私は両親みたいにはなれない、両親みたいに多くの者は守れない
でも
何時かは両親に追い付けるように、追い越せるように
今はただ
死ぬ気で頑張ろう
「っ！最後まで……諦めないんだからぁ！」
その強い想いに応える様に、掌の中の母から貰った東洋のお守りが
――強く輝いた――
そして光が一番強くなった時であった――

「初めましてだけどすいませんん゛！今すぐ半死になって下さいぃぃ粕闇魔さまあぁ！」

何かが叫びながら空から降ってきた――――

その後はもう理解が追い付かなかった

今まで押さえ付けられていた体が楽になり、

光が収まって目を開けて見るとそこには――――なんとあのアガレスに馬乗りになり顔をこれでもかというほど殴りつけている男がいたのであった――――

■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■

■■ｓａｉｄ　小次郎■■

「粕闇魔さまあぁ！ぼくぁ天国に行きたいんですうぅ！だからあぁぁ！」

俺は今闇魔様？をタコ殴りにしていた

そうである

あれからホースの中をまるでウォータースライダーを滑る様な感覚で優雅に移動していた俺は遂にホースの終わりを見つけ飛び出した

そして見つけたのだ

金髪の若い姉ちゃんを押さえ付けながらその禍々しい（ていうかでかすぎねぇ？閻魔様の奴）イチモツで今まさに金髪の姉ちゃんを貫こうとしている閻魔様を！

（流石は閻魔様だ！あの様な凶器で女に襲い掛かるなんて！……だが負けちゃいられねぇ……）

「初っぱなから舐められちゃあ駄目だ。よしっ！先手必勝だ！そぉい！」

俺は閻魔様へと一直線に夜空に煌めく流れ星の様に襲い掛かる

「初めましてだけどすいませんん゛！今すぐ半死になって下さいぃぃ糞閻魔さまあぁ！」

それからはもう一方的であった

閻魔様が何かを喋る前に何かをする前にひたすら殴り続ける

「屑閻魔さまあぁ！そぉいそぉいそそぉい！こんなもんすかぁ！まだぼくぁ半分の力も出していないんですがぁ！」

そして気付いたら閻魔様はくたばっていた

■■said　out■■

■■？？？■■

私が今の状況を必死に理解しようとしていたら……アガレスが動かなくなってしまった……

そして

「ややややってしまった……まさか閻魔様を殺しちまうなんて……あわわわ…わ…いやちょっと待てよ…冷静に考えてみろ……地獄で一番偉いのはそこでくたばっている思いの外弱かった閻魔様いや閻魔な訳だ……そしてその閻魔を殺した俺は？……」

暫くの静寂

「何という事だ……俺は自分が恐ろしい…まさかあの地獄を支配してしまうとは……くくく……あっはははははは！ひぃっひひげぼぉごほっ！」

とりあえず大分落ち着いてきた

そして改めて

今一人で気が触れた様に笑っているこの男を眺める

（なんていう不吉な男なの……）

男を一言で言い表すなら〝黒〟その一言だ

周りの闇に負けないくらいおぞましい黒髪

全てを飲み込んでしまうのでは無いかと思わせる黒目

そして

（あいつの体に巻き付いているあのローブ……昔教本で見た夜叉のローブにそっくりだわ……）

この大陸の者なら全員が恐怖するであろう最強の魔神――夜叉――

それに似た……いや丸っきりおなじローブを纏ったこの男が彼女を悩ませていた

（いや駄目よ。見かけはあんなんでも一応助けてもらったんだからお礼ぐらいはしないと……）

そうである

どれだけ見かけが怪しくてもあの男は命の恩人

だったら礼を返すのが当たり前なのだ

そして意を決して声をかけようとした時だった

「げほぉ！ん゛んっ……まぁ冗談はさておき」

男が此方に顔を向け話しかけてくる

「そこのあんた、一つ聞きたい」

「え？」

出鼻を挫かれつい変な声が出てしまう

そんな私を気にかける事なく男が続ける

「周りにいる物騒なコスプレ連中はあんたの知り合い？それとも闇魔…じゃなかった、こいつの知り合いか？」

「こすぷれ？…って！周り？！」

しまった！

私が考えてる間にアガレスの部下達が周りを囲んでいた

「なんて事！私の馬鹿！ホントに馬鹿！早く逃げないと……」

一難差ってまた一難

幸い一番の障害であるアガレスは目の前の男が倒してくれた

男？

……とここで男の存在を思い出す

目の前の男はアガレスを倒してしまっている

第三者が今の状況を見れば確実に男が疑われる

（そうなる前に早く逃げないと）

「貴方！今すぐここから逃げるわよ！早くしないと「質問に答えろや、周りの奴らはお前の敵か？味方か？余計な言葉はいらん今すぐ答えろ」

私の心配をよそに静かな声、だが反論を許さない力強さが籠った声で男が問う

だが

「どういう事？」

男の質問の意味が分からず遂質問で返してしまう

その瞬間だった

男が一瞬で私の前まで移動し、片手で首を掴み宙に浮かせる

「いいか？殺されてたくなけりゃ今すぐ答えろ。周りの奴等はお前の味方か？」

突然の事に頭は混乱するが男の濁りきった目を見て、恐怖が勝り必死に男の質問に首を横に振る

それを見た男が手を離し私に背を向け小さな声で言う

「…男が七人に家畜が七頭……一年ぶりの食事だ……ユックリユックリ調理しないと……それじゃあ〝頂きます〟」

私は忘れないだろう

これから行なわれる惨劇を

この男の狂気を

■■said out■■

――――誰もが恐れる死臭の森……その森の中、これから歴史に名を残すであろう男と女が初めて顔を合わせる――――
――――その出会いがこの大陸を大きく変える事になる――――

――1――

――2――

■■???■■

柳小次郎という男は前の世界で猟奇的大量殺人犯と呼ばれ世界中の者達から恐れられていた。

殺した人間の数は記録上150人を超えると記されており老若男女構わず犠牲になっていった。

そもそもなんで柳がこの様な狂事を行なったのか?

ある精神科医は言う。

精神に異常をきしていて犯行を行なったと

ある脳科学研究者は言う。

トラウマが原因で犯行を行なったと

ある神父は言う。

目的があっての犯行だと

色んな説が出ているが本当の事は誰にも解らなかった。

だが諸君らはこれからその理由を知る事になる。

柳が犯行を行なった本当の理由を――

■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■

■■ｓａｉｄ　小次郎■■

今俺は全身を固そうな鎧で固め、手に人を殺す為の武器を持っている七人の男達に囲まれていた

七人の内五人は、昔西洋で使われていた様な両刃の中剣を持ち、二人は刺突に特価した長さ一、八メートル程の槍を持っている

初めは馬に乗っていたのだが、俺を見た瞬間怯え始め飼い主を放って逃げていった

（昔、馬刺にハマってた時殺しまくったからなぁ……）

「そこの貴様！何者だ！」

七人の中で一番偉そうな奴が威勢よく叫ぶ

（ていうかここどこなんだろうな。地球のどっかか？いやでも俺死んだしなぁ…もしかして首だけどっか飛ばされてそこから復活したとか？……普通の人間だったらあり得ないんだけど俺だからなぁ……）

色々考える

だが

（そんな事どうでもいい……後で女に聞けばいいし……やっぱり喋るなら女の子だよね！）

それに

（もう待てない。今すぐ血を肉を臓器を早く）

体が叫ぶ早く殺せと

心が叫ぶ早く奪えと

（もう我慢できない……1年待った1年も……まぁ向こうも同じみたいだしね）

「質問に答えろ！ダウンの者かセシアの者か！？場合によってhぐぇっ」

「いや地球人です」

男が五月蝿かったから喉に拳を叩き込む

只の拳ではない

中指の第2間接を尖らせた崩拳の構え

人体を壊すためだけに作られた代々柳家に伝わる流派

【剛柳・柳川山海拳】《ごうりゅう・やながわさんかいけん》

この流派は全ての格闘技の技を取り入れ、効率よく人体を壊す為に作られた正に殺人拳

柳川山海拳の基本の構えである崩拳は極真流空手や中国拳に良く伝わる構えで、普通に殴るよりも力が一点に集中するので痛みが増し、打つ所を選べば子供でも人を殺せる

それを今わざと半分以下の力で男の喉に打ち込んだ

「℃¥$££%！」

「苦しいか？苦しいよな？息がしにくいよな？話せないよな？血が詰まって痛いよな？」

話している途中にいきなり喉を殴られ、血を吐き出しながら倒れる男

（ほっといたら勝手に死ぬけどね、俺はそんなに酷くないからね）

周りの男達は俺が瞬間移動したように見えたのだろう

呆然としていた

（見かけ倒しかよ……まぁ素人の方が気持ちいいけどね）

「あ〝っぐぇ」

「よいしょっと」

肉が徐々に千切れる音

「あ〝あ〝あ〝が！い〝い〝があ〝！」

「綺麗な耳してんなぁ、俺にくれよ」

俺の悪い癖

綺麗なパーツを見るとすぐに手が出ちゃう

「っ！やめろぉ！」

仲間の叫ぶ声で我に帰った男が剣を振り上げ向かってくる

（馬鹿すぎる……数で囲んで槍を出せ槍を）

剣を上から切り下げようとしている男の両手首に俺の左手首をあて
止めてやる

「なっ！」

「驚いてる暇があるんなら回避行動を取り距離を稼げ」

と言いながら左手を外し相手の顔に向け突き出す

支えをいきなり無くした相手の腕は勢いよく下にさがり、それと共
に自然と体も前に出る

俺の掌の形はじゃん拳でいうパー

（するとこうなります）

「ぎゃあああぁぁ！！」

人差し指と中指に伝わる眼球を突き刺す感触

「これでまた勉強になりましたね粕共。俺が教えてやったんだ、目
ん玉の一つや二つ安いもんだぜ」

言葉と共に激痛で叫んでいる男の喉にも突きを打つ

（二人目でやっと気付きやがったかチン粕共）

仲間二人をやられてから気づく周りの男共

（だが時既に遅し！残像拳！）

男達が俺を囲む前に一番左にいた槍を持つ男に向かって散歩（さんぽ）を使う

散歩

古武術の一つで瞬真や瞬道とも呼ばれる移動術

それを柳家の者が改造したのが散歩

胸を地面スレスレまで下げ、足を開脚するように広げ一気に相手に向かって走る

すると相手は一瞬俺が消えた様に見え、驚いてる間に後ろへ回る

だったら見失わない様にすればいいだけなのだが

（普通の人間が使えばそれで終わりなんだけどね、生憎俺は普通じゃないんで）

柳家の人間は五歳になったと同時に初めて人を殺す

そしてその夜の晩飯は殺した相手の肉や臓器になる

何故そんな事をするのか？

理由は単純だった

（同族を食えば食うほど強くなり、その後にあるのは果てぬ餓え。
これが柳の呪い……柳の闇であり抗えぬ宿命）

昔餓鬼と呼ばれた呪い

同族を食らえば食らう程その分強くなる
だが

一度その味を知ってしまうと死ぬまで忘れられなくなり、最後には
自分を食らって死ぬとされる狂気の呪い

代々柳の血筋を持つ者は餓鬼の呪いを親から受け継ぐ

俺もそうだ

親父は呪いが薄かったみたいだが、俺は親父の親父、つまり祖父の
血を色濃く受け継いだ

柳武蔵（やなぎむさし）

第二次世界大戦で何千という人間を食らった正真正銘の化け物

敵も味方も関係なく見境なしにかぶりつく餓鬼の王

その血を何故か色濃く受け継いだ俺

（だから吸収率が半端ないんだろうな。その分餓えも凄いけど）

今まで俺が食べた人間の数は

４６４人

それだけの人間の全てを吸収した俺はもはや人間を辞めた強さになっていた

閑話休題

「お前は鼻が逞しいからな。えいっ」

ブチブチと繊維が千切れる様な音

「あぎやあああぁ！」

（これこれ！最高の音楽！だが食べるのはまだ駄目だ）

女の前では食事は出来ない

誰でも人を食う奴なんかとは話したくは無いだろうしな

「花の次は背骨をくれよ！な？いいだろう」

男の顔が痛みと恐怖で歪む

周りの男達も後退り、ただただ今の状況を眺めている

（薄情な粕共だな。だがそれがいい）

かかって来ないなら一人一人ユックリ調理出来る

「えいやぁ！」

後ろから相手の首の付け根に手を入れ背骨を掴む

「あ〝〝がぃ〝〝っ！」

声にならない痛み

痛みで気絶する事も出来ず自分の背骨を抜かれる感触を感じながら

ショック死する

「魔剣セボネー……なんつって！」

肌色がかった赤で染められた背骨を肩に担ぎ、もう一人の槍の持ち

主へと散歩する

（魔剣ていうかムチだな）

「ひ、ひいぃ！」

遂に恐怖に耐えきれなくなった男達が逃げ出す

（さっちゃんはね足を奪っちゃうんだみんなから）

人間の目では追えぬ速さで背骨を振り抜き、男達の足を砕く

背骨もついでに砕けた

「なんか嫌な気配がプンプンしやがる……早めに殺してさっさと女と逃げるか」

何かが森の奥から俺を見ている、いや監視している様な視線を先ほどから強く感じる

（こんな気配爺以来だぜ）

思いながら遊びを終える

足を失い倒れている男達の首を足で全て踏み潰し女に向かっていく

そんな時だった

（っ！なんだこれやべぇ！やべぇ！やべぇ！）

後ろから感じたただならぬ気配

冷や汗が背中を伝う

（人間じゃねぇ！まさか本当に閻魔様でも現れたか！ファック！）

このまま背中を見せるのには耐えられそうもない

意を決して素早く後ろを振り向く

そこには

――絶望がいた――

■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■

■■ｓａｉｄ　女■■

私は鬼を見ていた

目で見えぬ速さで動き回り、まるで玩具を壊す様に人を殺す鬼を

（あいつらが死ねば私も同じ様に殺されるのかなぁ）

どこか他人事の様に考え現実から目を背けていた

それほどまで恐ろしかった

これならまだアガレスの方がマシだったかもしれない

希望を見つけたと思い近づくとそれは絶望だった

そんな気分になってしまう

（お母様……私ももうすぐそっちに行くかもしれないよ）

思い出すのは最愛の母の顔

優しくて暖かった母の顔

走馬灯という奴だろうか？

そんな事を考えていた時だった

今まで楽しそうに人を殺していた男が急に慌てる様に動き初め一瞬の間に兵士達全員を殺した

そしてこっちに向かって歩いてくる

（あぁ……短い人生だったなぁ……結局私は何も…守れなかった……）

正を諦め覚悟を決めた時だった。男が歩みを止め顔を青くしたかと思うと凄い勢いで後ろを振り向く

（？どうしたんだろう？）

私はまた理解出来ずに男を見ていた

次の瞬間

「っえ」

男が消えたかと思うと体が宙に浮き凄い速さで景色が流れ始めた

「えっ？」

（なに！なんなの！）

訳が分からない

なんとか今の状況を考え理解する

なんと男に肩を担がれていたのだ

「ちょちょっと！なんなのあんた！降ろし」

その台詞は最後まで言えなかった

何故なら見てしまったから

私達の後ろから迫っていたのだ

本当の絶望が

本当の恐怖が

――その絶望の名は【夜叉】
歴史上最も恐れられ、災厄の死者、最悪の絶望と呼ばれたこの大陸
最強の生物

魔神【夜叉】であった――

その日ダウン帝国領地、死臭の森の中に災厄が降りかかった

■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■

■■ｓａｉｄ　小次郎■■

そいつを見た瞬間体が勝手に動いていた

女を肩に担ぎあげ今までで一番速く走る

「ちょちょっと！なんなのあんた！降ろし」

女が後ろの存在を見て途中で話すのを辞める

「う……そ……でしょ……なんであいつが……」

「お前あいつを知ってんのか？！教えろ！分かる事全てを！」

恐怖を感じたのは二度目だった
一度目は爺さんに殺されそうになった時
そして今回
それと同じぐらい
いや
それ以上に恐怖を感じていた

「話すからっ……せめておんぶにしてくれない？……うまく……話せない」

苛々するが仕方ない
女を背に背負い直す
「これでいいか？！早く話やがれ！」
遂声を荒げてしまう
「……あいつは夜叉…ミシュガインで一番恐れられている魔神よ……」

「魔神だと?!くそっ!ファック!フザケヤガって!」
いつも爺さんに言われていた
――如何なる時も冷静であれ
命戦の時に冷静でいられなくなる
その時は死ぬと思え粕坊主よ――
(爺さん!あんたはこんな状況でもそれを言えるか!)
いや
爺ならば冷静であるだろう
(ありがとよ粕爺。あんたのお陰で大分落ち着いたわ)
冷静とまでは言えないが大分落ち着いた
(よしっ!出口が見えてきた!このまま走り抜け)
《ドコヘイコウトシテイル?餓鬼ノ王ヨ》
頭に直接話かけてくるナニカ
自然と体が固まり動けなくなる

（糞がぁ！動け！死にたいのか粕が！）

《ソノ心配ハナイ……我ノ目的ハ貴様ヲコロスコトデハナイ》

頭の中を見ているってか粕野郎！

「なぁ魔神さん……とりあえず女は逃していいか？あんたとはサシで話したい」

逃げれないのはもう分かる

せめて邪魔になりそうな女だけでも逃がそうとする

《好ニスルガイイ》

「ありがとよ」

俺は女に話し掛ける

「お前名前は？」

まだ状況に追い付いていないのか

後ろの魔神が恐ろしいのか

（両方だっつーの）

「ふぇ？ミコラ…」

よく見ると凄まじい美人だった

（やばい唇噛みちぎりてぇ）

「ミコラか…いい名前だな。いいかミコラ、お前は後ろを振り返らず森の外まで走り抜けろ。有無は言わさん今すぐ行け」

「え？どうい「行けよ粕が殺すぞ」

少々可哀想な気もするが今の状況なんかでは優しさなんかかけられない

「…分かった…でも……助けて貰ったお礼もしたいから…死んじゃ駄目よ…」

こんな状況でお礼がどうとな、なかなか肝が据わっている

「分かったから早く行けよ」

ミコラは次こそ何も言わずに走り出す

（とりあえず邪魔は消えた……次は魔神様とのデートか、笑えねぇ）

《モウイイカ餓鬼ノ王ヨ》

「あぁ。感謝するよ、で俺になんか用か？」

改めて後ろにいる魔神を見る

身長は二メートルを超え、頭には厳つい何かの骨を被っており、何故か俺と全く同じローブを着ている

（あいつもあの刑務所の囚人か？）

《質問ニコタエルダケデイイ……ナゼ貴様ハコノ世界ニ現レタ？》

（俺が知りたいわ粕野郎！）

などとは言わず

「そんなの俺にも分からないよ。気付いたらこの森にいたんだからね」

正直に答える

《嘘デハナイナ……ダトスルトヤハリアノ小娘ノ……》

一人で考え始める粕魔神様

（やべぇ……俺もめっちゃ聞きたい事あるけど聞ける感じしゃないし……）

《……ココハミシュガイントイウ大陸ダ。貴様ガイタ世界トハ異ナル世界……デ貴様ハタシカニ一回死ンデイルゾ。ダガ貴様ノ魂ハモハヤ常軌ヲイシテイル……人間ドコロカ下位ノ魔人ニスラ匹敵シテイル……概ネ、死ニキレナカッタ肉体ト魂ガコッチニヒキヨセラレタンダロウ》

（心を読むってずるくね？）

俺の疑問は心を読みはった魔神様が呆れながら答えてくれた

（違う世界……死にきれない魂と肉体……引き寄せられて）

俺は考える

そして結論を出す

（つまりここは地球とは全く別な世界な訳か…という事はだ…俺は一回死んだはずなんだが今まで食べた人間の魂のお陰で死ぬに死にきれずこっちで蘇っちゃったって訳で……あれ？なんか俺って凄くね？やべぇ……また人をいっぱい食えるぜヒャッハー！）

テンションがうなぎ登りにあがる

だがそんな俺を嘲笑うかの様に魔神様が殺気を込め言い放つ

《ソレハ我ガユルサン》

今までで間違いなく最強の殺気

俺の殺気なんか虫けらに思える程の殺気

（こころされる）

だがここで引くわけにはいかない

俺にとってカニバリズムは生命線だ

他人を食わなきゃ自分を食ってしまう

餓鬼の呪いが初めて俺を苦しめる

《アンズルナ、同族食ライヲヤメロトイッタワケデハナイ》

「ほぇ？」

我ながら情けない声だ

《無差別ニ食ラウノヲユルサントイッタノダ》

なるほど

でもそれも結構厳しい

日が立つにつれ強くなる餓え

呪いで強くなる度餓えも強まる

だから前の世界でも最後の四年ぐらいは自分でも制御が聞かず公にまで出てしまい餌に釣られ捕まってしまった

（刑務所の一年間は本当に地獄だった）

《ソレモ心配ハイラナイ》

もう心を読まれるのには慣れた

だから質問を思い浮かべる

（心配はいらないって……餓鬼の呪いは誰にも消せないんだぜ？呪いが消える時は死ぬときだからな）

餓鬼の呪いは何世代にも渡って受け継がれている

しかも俺の呪いは伝説並みの強さだ、普通ではない

《タシカニ我ノ力デモソノ呪イハケセン…本当ニ恐ロシイ呪イダ》

（そりゃそうだ）

《ダガオサエルコトハデキル》

うん？押さえる？

《餓鬼ノ王ヨ…コレヲ食ベロ》

そう言いながら魔神様は真っ黒い固まりを差し出す

（命令されたら断れないじゃん！見るからにやばいってこのダークマター！）

見かけからして怪しすぎる黒い物体

《アンズルナ…貴様ガ考エテイルヨウナコトハナイ》

俺の心配を読んだのか魔神様が言う

（仕方があるまい…男は度胸だ！えいや）

一気に全部を口に入れ噛み砕き飲み込む

（こ、これは！）

「すんごくまずい」
思わず口に出してしまう

（なんにも変わんなくね？この魔神嘘を）

などと考えていると、体中に激痛が走る

「っがあぁ！」

（いってえぅぇぇ！）
やっぱりかこの似非魔神め！何がアンズルナだ！

やべぇぇ

暫く激痛が続く

「はぁっ！はぁっ！」

体中から汗が吹き出る

そしてすぐに変化が始まる

（体が軽い！腹が減らない！信じられねぇ！）

今まで空腹により重くなっていた体は嘘みたいに軽くなり、馬鹿みたいに空いていた空腹も収まる

《コレデモウ自分ヲ見失ウコトモナイダロウ、餓鬼ノ王ヨ》

「あぁ……本当に助かった」

《ナラバワレハモウカエルトシヨウ》

魔神様が消えかかる

でも最後に聞かなきゃならない

《餓鬼ノ王ヨ…コノ世界ハ貴様ガシラナイ命デアフレテイル。ソヤツラガミナヘイワヲノゾンデイルワケデハナイ…時ニハ貴様ヲ排除シヨウトシテクル輩モイルデアロウ。餓鬼ノ王ヨ…ワレハ貴様ガ目標ノタメニ、コノ世界デイキルタメニ必要トスルコロシハユルスツモリダ。ダガモシ貴様ガノロイニノマレスベテヲ刈ラストキハ…ワレガ貴様ヲコロス。餓鬼ノ王ヨ…貴様ノソノ呪ハコノ世界デハイシツノモノダ。アマリニモ強スギル…ダカラワスレルナ…ツヨスギル欲ハミヲホロボス……コレガ貴様ノトイニ対シテノワレノコタエダ。スキニイキロ餓鬼ノ王柳小次郎ヨ》

魔神様あんたのお陰で柳の闇が一つ消えたよ……

「なんで災厄の死者なんて呼ばれているんだ？」

《コノ世界ノ秩序ヲマモルタメ…トキニハ犠牲ヲダサナケレバナラ

ナイ…ワレハコノ世界ノタメナラスベテヲ犠牲ニシテデモマモリヌク…ソレダケダ》

俺は魔神様の本質を知った様な気がした
だから

「魔神夜叉殿。柳家当主、柳小次郎として言う…貴殿に心からの敬意と感謝を送らさせて貰う……本当にありがとうございました！俺はこの恩を一生忘れない！絶対に何時か恩は返す」

これまで体の内にあった餓えの塊

それを閉じ込めてくれた夜叉に心から感謝する

《フッ……餓鬼ノ王ヨ。貴様ニ助言ダ……モリノソトニイル小娘ノソバカラハナレルナ。ナニガナンデモマモリヌケ……タッシャデナ柳小次郎ヨ》

そう言いながら夜叉は闇に消えていった

「最後の最後にデレやがって……ていうか結局何の用だったんだ？」

まぁそれは一先ず置いといてとりあえず食事にしよう

餓えは大分収まったとはいえ、流石に一年間の断食で体が人間の味を求めていた

（八人も食えば当分は持つだろう）

「それから全部考えよう」
ちょっとだけルンルンな気分で逃げてきた道を戻る
五分もかからず現場に着く
「まずは雑魚共からだな」
一番旨そうな偽閻魔様は最後にする
（俺は好きな物を最後に食べるタイプなのだよ）
目の前には久々の人間
涎が止まらない
（我慢ならねぇ！）
「いただきます！」
背骨を抜いた中年男にかぶりつく
「うんめえぇ！やっぱり人間が一番だな！他の食べ物全てを凌駕しやがる！」
夢中で貪る
（……体に力が戻る……やっと半分まで戻ったか）

言い訳ではないが、夜叉と鬼ごっこをしてた時は本来の半分の力も出せていなかった

今食べている雑魚共は全然問題無かったが、偽闇魔様はちょっとやばかった

ちょっとだけだが

（こっちの人間は地球の奴らなんかより大分強いな……一人食っただけでもう満腹に近い…）

夜叉の力も効いているんだろうがそれを抜きにしてでも凄かった

それともうひとつ

（なんだこの不思議な力は……）

今まで味わった事が無い味が混ざっていた

決して不快ではなくむしろ

（体がめっちゃ喜んでやがる）

それは新しい何かが体に馴染む感覚

「もっと」

満腹に近いのだが

一年間の断食はここからが凄かった

休む事なく食べ続け後はメインディッシュの偽闇魔様だけだ

（雑魚共なんかとは比べもんにならないくらい旨そうだ…いや今まで食ってきた人間なんかよりも格別に旨そうだ）

「ごくっ……」

満腹の筈なのに腹が減る様な不思議な感覚

（なんかこいつを食ったらさらに口が肥そうなんだが）

「まぁいいか。じゃあいただきます！」

早速腕にかぶりつく

「っ！」

それは今まで生きてきた中で間違いなく一番幸せな時だった

「なんだこれは……こんな者が存在していいのか……いや存在していいんだよ！ちくしょう旨すぎる！今までの奴らがゴミみたいじゃねぇか！」それからは早かった

顔が汚れるのも関係なく獣の様に貪る

（もっと！全部だ！）

あっという間に完食

そして又もや始まる体の変化

「っ！体が焼ける！」

燃えるのでは無いかと思ってしまう程体が火照る

暫くし段々と熱が収まる

その変化は凄まじかった

（あり得ない……人間十いや軽く百は超えてる…）

それにはっきりと感じる別の力

「もう同じ人間には負けないだろうな……爺さん以外だけど」

それは例えでも虚勢でも無い事実

そう思わせる程の自身

偽闇魔様は今までで一番美味しかった

それは間違いない、だがそれ以上に美味しい人間も間違いなくいるだろう

俺には分かる

食べてみたい

（でも夜叉との事もある）

今自分が感じたのは餓えによるものではない

単にこいつ以上に美味しい物を食べたい

それだけの事

それだけの欲

（強すぎる欲は身を滅ぼす……かぁ）

確かにそうだな

このまま行けば自分は餓鬼の呪いに負けるだろう

（まぁとりあえず女のところに戻るか……大分時間もたった筈だし）

そう思い戻ろうとした時であった

ある物が目の端に移る

（あれは……）

それは二メートルを超える赤黒く、闇の中禍々しく輝く大槍だった

（確か偽闇魔様が持ってた槍……）

何か惹き付けられる

ここでちょっと言いたい

俺の趣味は呪われた物を収集する事である

自分が呪われているせいか何となく分かるのだ

例えどんなに安っぽい包丁でも何かを殺し続ければ怨念や欲が宿る

そして目の前には今まで見たことの無いくらい呪われている大槍

ここまで話せば分かるだろう

「もぉっらい」

どうせ前の持ち主は俺の腹の中だし盗っても問題はないだろう

近づき手に持つ

その瞬間

――コロセエェ――オカスノダァ――アイツヲ――ミナゴロシダァ――タスケテェ――

凄まじい怨念と欲の塊

今まで集めて来た中で間違いなく一番の代物

大槍自体とてつもない大業物で、長年殺し続けて来たのだろう

何千何万もの死者の怨みが詰まっている

「やべえぇぇぇ！とんでもないもん拾っちまった！」

もう俺は止まらない

死んだと思ったら実は生きていて、人生で一番美味い物を食い、制御が効かなくなっていた飢えが収まり、ついでの筈なのにとてつもないくらい凄まじい呪いの代物を手に入れた

これで有頂天にならない奴がいたら教えて欲しいくらいだ

「いやぁ今日は本当にいい日だわぁ」

暫く大槍で型を鳴らしやっとこさ女の元へ向かうのだった

■■ｓａｉｄ　ｏｕｔ■■

――３――

■■ｓａｉｄ　？？？■■

「…報告は以上になります！」

今俺の目の前にいるのは偵察から帰って来た部下だ

「追跡部隊が鎧や武器を残して消えただと？」

「はい！森の出口付近でおびただしい量の血痕が見つかりその近くには副隊長の鎧と、花恋騎士団の鎧と武器、何故か衣服も残されていました。その後も森中を探したのですが結局追跡部隊は一人も見つかりませんでした」

部下が詳しく説明する

「アガレスの大槍は無かったのか？」

「はい…鎧と衣服、魔道具はあったんですが、大槍だけは見つかりませんでした」

（どういう事だ？）

キスラの部隊の連中はどうだっていいが、アガレスは違う

アガレスは俺が傭兵だった時からの唯一の部下で強さは間違いなくダウンの中でも五本の指に入るだろう

それにあの魔神の槍を使いこなせれば俺の本気に迫る程強くなる

そのアガレスも消えた

（まさか死んだか？）

考えたくはない

だが現にアガレスは帰ってこず、文字通り跡形もない

（くそ……まだ決め付けるには早いが最悪の展開になるかもしれない）

あの女が国から逃げ出しそれを追ったアガレス達が消えた

確かに死臭の森は高ランクの魔獣や魔人達がうじゃうじゃいる

（アガレスが獣や魔人達に負けるとは思えない。それこそおとぎ話や教本でしか見たことが無い魔神共が出てこなければあり得ないだろう……それとも確認されていない新種か？あり得なくは無いが可能性は低い）

頭によぎるのは最悪のシナリオ

（あの女の関係者か？だがあの時は確かに全員殺した筈だ。血統図も確認した……やはり新しい味方か？それもアガレスを殺しあの魔神の大槍を持つ事が出来る程の何か……）

考えれば考えるだけ嫌な方に思考が進んでしまう

（アガレスよ……お前は今何処にいる？お前なら死ぬ時でも何かを

俺に残す筈だ…）

「隊長…もう一つ報告があるんですが……」

目の前にいた部下の声が俺を思考の海から現実に戻す

「あぁ聞かして貰う」

「これは死臭の森近くの村人達が言っていたんですが……」

部下が何処か言いづらそうに話す

（死臭の森近くと言えばあの邪教徒達の村か）

ダウン帝国は、中心に城下の町が城壁で守られており、その城壁の回りにはいくつかの小さな村が城壁を囲む様に並んでいる

その中に異常な村がある

（魔神・夜叉を称える村……サイモン）

ミシュガイン全土で恐れられ嫌悪されたいる魔神を村の守護神として称え、奉っている異質の村

死臭の森からは一番距離が近く危険とされており、ダウン民なら誰も近付こうとはしない

（そいつらの話など捨て置けばいいのだ…）

「追跡部隊が出動した夜に…その…死臭の森に夜叉が現れたと騒いでおり、今もまだ騒いでいるとの事で…」

（馬鹿馬鹿しい…夜叉が現れただと？くだらん……）

何時もそうだ

やれ夜叉が生け贄を欲している

やれ夜叉の裁きが近い内に起こる

そして今回はついに夜叉のお出ましか

しかもまだ騒いでるとの事

（もはや呆れるしかない）

だがなぜこんな事を俺に報告するのか

何時もなら部下達だけで処理するんだが

そんな疑問は次の言葉で消える

「それだけならまだサイモンの連中の戯言ですむのですが、今回の騒ぎはサイモン以外の村の者達も同じ様な事を言っており……追跡部隊の事もありまして隊長にも報告しておこうと…」

「サイモン以外の村人もだと？」

（確かにいつもとは違うが……）

サイモンの近くにある村と言えばリーグぐらいか

（あそこは猟師の質が高い事で有名な村だが）

「因みにどこの村だ？」

「はっ。リーグの猟師達が森を見張っていた所、大規模なアースワイバーンの群れが砦の近くまで近付いて来たそうです。その全てが何かに怯え最後には同士討ちを始めたそうです」

「アースワイバーンの群れが同士討ち…」

予想は当たっていた

だが

まさか猟師だけではなくアースワイバーンまでもが異変を感じていたとは

（魔獣は同士討ちを嫌う…アースワイバーンはその中でも特に仲間内での絆が高かった筈だ）

昔、ある国がアースワイバーンの赤子を拐い戦争に利用しようとした事がある

拐った翌日には何百と言うアースワイバーンが赤子を取り戻すため、国を襲ったという話は有名だ

（そのアースワイバーンがな…）

「分かった。お前達はこれらの情報をより詳しく調べ、また報告するように…あぁそれとマルバスを呼んで来てくれ」

「分かりました！ではこれで失礼致します！」

そう言い部下が部屋を出ようとした時だった

「失礼する」

勢い良く扉を開け不機嫌そうに眉を寄せている金髪の男が入ってきた

（なんで次から次へと厄介な事が起こる）

「破邪の槍隊長アモン・リーバス、今回の追跡部隊壊滅の責を貴様に問いに来た」

長い金色の髪を靡かせ人を見下している様な目をしている男

ダウン帝国王宮守護騎士団―花恋騎士団隊長キスラ・カラメル―

こいつが今部屋に入って来た張本人だった

「……キスラよ、ノックも無しにいきなり入ってきて直ぐに質問するのは些か失礼すぎないか？」

（いつもタイミングが悪すぎるんだこの男は）

「黙れ！私はセシアの女を逃がしただけでは無く、私の団員達を殺した貴様の部下の責をどうするかと聞いているんだ！早く答えろ！」

（はぁ……）

なんでこいつはここまで馬鹿なんだろうか

（お前が強引に自分の部下をアガレスに着けたんだろうが糞が。それに責を問うなら皇帝に直接言いやがれ間抜け）

まぁそんな度胸も根性も無いから俺の所に文句を言いに来たんだろう

（何時もなら適当にあしらうが今回はそうもいかんぞ）

こいつは自分に非が回って来るのを恐れてるんだ

自己保身と媚を売るしか脳のない馬鹿が

（アガレスを失った今、もう四の五の言ってられん）

「俺の責だと？部下の責だと？ふざけた事抜かしてんじゃねぇぞ腰抜け」

ついつい素の喋りが出てしまう

こいつが何か言う前に一気に潰してやる

「第一今回の任務は皇帝が直にアガレスへと命じた。本来ならうちの団だけでやるはずだった事をてめぇが強引に入ってきたんだろうが糞野郎、忘れたとは言わせねぇぞ？皇帝の前でてめえが言ったんだからな。それなのになんでうちがてめえん所の尻拭いをしなきゃなんねぇんだよ間抜け！こっちは副隊長を失ってんだよ！これ以上グダグダ抜かすんならブチ殺すぞ糞が！」

後ろでは部下がどうしたらいいか分からず右往左往していた
キスラはいつもと違う俺の態度に驚き、その後言い返せないのが悔しいのか顔を真っ赤にして歯を食いしばっている
（馬鹿が調子に乗ってんなよ）
「っ！だ、黙れ！傭兵崩れの屑が！貴様の部下が馬鹿で使えないから私が補佐してやったんだろ！それを貴様は！」
こいつの言葉は最後まで聞こえなかった
こいつは俺の逆鱗に触れた
俺の仲間を
俺の家族を
俺の誇りを
アガレスを
――殺してやるよ――
気が着けばネックレス状にしていた俺の大槍――ヘラクレイトス――をキスラに向け放っていた

キスラはまだ俺の攻撃に気付いていない

（死ね雑魚が）

あと少しで槍が刺さる

その前にキスラが横に逃げた

「……なんの真似だ？マルバス」

「隊長落ち着いて下さいよもうっ！冷静にならないと！ほら深呼吸して……スーハー……隊長？」

「命令だそこを退けマルバス」

「駄目ですどきません」

邪魔をするな

「最後だ……そこを退けマルバス・キエフ！」

殺気を込め言い放つ

「隊長、何があったかは大体想像はつきますがそれは駄目です。槍をしまって下さい」

「フザケるな！こいつはアガレスを俺の家族を侮辱しやがった！死ぬ以外の道はこいつにはない……だから退け」

これ以上邪魔を！

「隊長、よぉく聞いて下さい。今貴方が居なくなると私達は居場所が無くなります、そうなれば私やガミジンは生きていけません、貴方無しでは生きていけないんです……だから、だから今は抑えて下さいっ！アガレスさんがいつでもこの場所に帰って来れる様に！アモン隊長！」

「っ」

やっと冷静になり気付く

（何をしているんだ俺は……これじゃあキスラと何にも変わらねぇじゃねぇか）

「マルバスすまなかった……俺が一番動揺していたみたいだな……」

本当にいい部下達を持った

感謝してもしきれない

「よし！いつもの隊長に戻った！……もぅ後で頭撫でて下さいよ？

ホントに恐かったんだから…」

「あぁ本当にすまない……それぐらいで済むなら今すぐにでも」

言いながら手を伸ばそうとする

「あのぉ…凄い嬉しいんですが、先ずはコレをどうにかしません？」

マルバスが指差す方をみる

（本当に何でこんな奴が守護団長なんだろう）

床の上で気絶しているキスラ

（まだ漏らしてないだけましか…）

そんな事になったら間違いなく魔法で消し炭にするだろう

「そうだな……適当に医療室の前にでも捨てて置け。おいお前」

まだ殺気に当てられオドオドしているもう一人の部下に言う

「え？っは、はい！」

やっと正気に戻ったのかキスラを引き摺りながら部屋を出ていく

「ところで隊長、あたしに何か様ですか？」

（何で分かったんだ？）

「だって隊長顔に出やすいんだもん」

まるで心を読まれているみたいだ

「気をつけないとな……ごほん……破邪の槍隊長補佐マルバス・キエフよ。今から皇帝に許可を貰いに行く、ガミジンに部下を編成させ、お前は俺に着いてこい」

「はっ！」

俺の命令に直ぐ様返事をしイヤリング型通信魔道具で誰かに連絡をする

（忙しくなるな……）

「……ところで隊長何の許可を貰いに行くんです？」

マルバスが聞いてくる

「そんなの決まってるだろ？アガレスを探しに行くんだよ」

こうは言っているが、心の中ではもうアガレスがこの世にいない事を認めてしまっている

本当は認めたくはない

だが曖昧な気持ちで行けばまた部下を失うかもしれない

（それはもう許されない……二度と失ってたまるか）

心に誓う

――なぁアガレス……お前の仇は絶対にうってやるからな――

（その前に皇帝に会わないとな……なぁに、あの女を探しに行くって言えば大丈夫だろう）

そして準備を整え、マルバスに話し掛ける

「準備はいいかマルバス？」

マルバスが答える

「いつでも」

「では行こうか……」

――魔神とやらに会いにな――

■■said out■■

――4――

■said ミコラ■■■

「何をやってるのよ私は！」

私は今猛烈に後悔していた

「自分だけこんな所で何をしてるの！」

さっき森であった色んな出来事

ダウンから逃げアガレスに捕まり真実を聞かされ、絶望していた所を知らない人に助けてもらった

今でも何が起こったかは分からない

その命の恩人を放って自分一人だけ逃げる

（ほんっと最低！今すぐ戻りなさいよ！）

自分でも分かっていた

最低の女だ

何が守るだ

結局またこうして自分だけ逃げてるじゃないか

（助けに……行かないと）

頭は今すぐに行けと私に命令を出す

だけど体が動かない
ミシュガインでもはや伝説と成っている魔神種
その内の一体である
災厄の死者、夜叉
教本でしか見たことの無い伝説の死神
まさか私が見る事になるとは
（そんなの言い訳よ！）
体はまだ震えている
男に逃げろと言われて後は無我夢中で走った
夜叉も恐ろしいかったが男も同じぐらい恐かった
今も瞼に焼き付いて忘れられないあの光景
ダウンの兵士達を楽しそうに蹂躙した男の姿が
（助ける？私が？無力な私が？無理よ……それにあの男を助けて何になる？）
頭の中では少しでも自分が楽になるために、必死で言い訳を考える

「関係ないでしょ！恐かろうが、恐ろしかろうが！早く行くの！」
もう耐えられなかった
堕ちていく自分自身に
（もう逃げないって決めたんだから）
そして森の中に戻ろうとした時であった
「やっと抜けたか…お？ミコラこんな所で何してんの？」
丁度よく男が森から出てくる
「良かったぁ……」
その安堵は男の無事からか、はたまた自己保身からか
「無事で良かった…怪我とか無い？」
「あぁ大丈夫だよ、もしかして俺の事待っててくれたの？それだったら悪い事したな」
先ほどまでの雰囲気とは全く違う男に安心してしまう
「ううん、命の恩人を置いて逃げるなんて出来ないわ。…本当にごめんなさい……私貴方を置いて自分だけ逃げたりして」

何を都合の言いように言っている

自分が安心するための謝罪

（本当に最低な私）

「そんなの気にしないでいいよ、殺されそうになってたんだし…それにあんな化け物誰だってビビるからから」

笑って言ってくれる

本当にさっきまで別人みたいだった

「改めてお礼を言わして下さい、命を一度だけでは無く二度まで助けて頂いて本当にありがとうございました。今は何も礼を出来ませんが何時か必ずさせて貰います」

「いいえお気に召さらず…あっそうだ、お礼の代わりと言っちゃなんだけど暫く君に付いていってもいいかな？俺こんな所初めて来たから何が何だか分からなくって」

苦笑いしながら聞いてくる男

「はい私は全然構いませんが…でも本当にそんな事でいいんですか？少ないかも知れませんが多少金銭も持っていますし、何なら今すぐ働いてでも」

あまりの欲の無さにちょっと戸惑ってしまう

「いいってそんな事しなくても！それにさっきみたいに敬語なんか使わなくていいから」

（なんだか気が抜けちゃった）

先ほどまでの私を本当に恥じる

「分かったわ。じゃあとりあえず国境の砦に向かうけど大丈夫？」

男の友好的な態度に幾らか心が解かれていく

「うん全然問題ない。でも国境に向かうんなら服を着替えたいな…それに俺身分証なんて持ってないんだが大丈夫か？」

言われて気付く

確かに男の身なりは酷かった

（私も人の事を言えないけどね）

夜叉のと同じローブは血と泥などで汚れ、背中にはアガレスの槍が……

「って貴方！その槍をどうして！」

何故気付かなかったんだ私は！

男の背にはアガレスが使っていた禍々しい槍があった

「あぁこれ？落ちてたから貰っちゃったんだ。凄い槍なんだぜこれ」

「落ちてたって貴方！そういう問題じゃ」
あまりの衝撃に声を荒げしまう

「ん？何か不味かったか？……でも今更捨てないぞ！せっかくの大業物なんだ」

「……もういいわ」
何を言っても無理だろう

（目立たないようにしないと、見つかったらまずいわね……それに服も手に入れないと）

あの槍はアガレスが持っていた物だ

色んな意味で目立ってしまう

それに万が一にでもダウンの兵に見つかれば只ではすまない

（忘れてたけどこいつがアガレスを殺したんだった……）

頭が痛くなってきた

助けて貰ったとはいえ、ダウンの最強部隊である破邪の槍の副隊長を殺してしまったんだ

犯人と知られれば……

（とにかく今は早く服を手に入れて逃げないと）

何はともあれダウンから逃げれたのだ

（これから始めるんだ全てを）

これからの事を心に決め男に向かって質問する

「今更なんだけど良かったら改めて自己紹介しない？」

「そう言えば俺だけまだ名を言って無かったな…じゃあ改めて。俺の名前は柳小次郎と言う、柳が字で小次郎が名になる。これからよろしくお願い申す」

（コジロウ・ヤナギ……変わった名ね……東洋の産まれかしら？）

「私はミコラ、ミコラ・グレイよ。グレイが字でミコラが名よ、こちらこそよろしくねコジロウ」

――これが私とコジロウの長い物語の始まりだった――

■■said　out■■

■■said　小次郎■■

（ちょろいなこの女）
自己紹介を終えた俺達はこの女、ミコラの提案で服を手に入れにある場所に向かっていた
（でも良かった…何とか猫を被ってここまできたが……）
そうなのだ
あの時夜叉に言われたミコラから離れず守りぬけと言う言葉
出来れば一人で行動したかったが、目標も無いしせっかく夜叉からアドバイスを貰ったのだ、無下にはせず何とか女に着いていける様にした
（まぁこの世界の事は何も分からないし、ミコラめっちゃ美人だし、ていうか本当に美人すぎるぞ……人間か？柄にもなく受かれちゃうぜ）
こっちの理由がほとんどを閉めていた
「なぁミコラ…一体何処に向かってるんだ？」
ずっと黙っているのもつまらないので話し掛けてみる
「うん？今から向かうのはキャラバンポケットよ」
「キャラバンポケット？何だそれ？」

初めて聞く単語

「知らないの？……コジロウは何処で生まれた訳？普通は何処にでもいる筈だけど…」

早速ボロが出ました

だが大丈夫だ

こんなピンチなんぞ腹の中に手留弾を入れられた時に比べたら屁でもないわ！

（落ち着け…まだばれる訳にはいかない）

「そうなんだ？実は俺今まで糞でかい山の奥にある小さな村出身でさ、この歳まで外の事何も知らないで生きて来たんだ。だから本当に何も知らないんだよね！」

（完璧すぎる…これなら突っ込まれる事もあるまい…）

「そうだったんだ…ならしょうがないわよね、そんなに詳しくは説明出来ないんだけど」

ちょろいなミコラよ

そして一呼吸置き

「キャラバンポケットっていうのはね、人が住めない様な場所や危険な場所、時には町にも現れる移動商店の事よ」

なるほど…つまり何処にでも好きな場所に店を出す移動式の店って事か

（そこで必要な物を揃えるんだな）

ふとおもう

（なんか楽しいな）

長らく忘れていた新しい事を知る喜びと人と触れ合う時間

（こんな事思えるのも飢えが無いからだろうな）

夜叉に会う前の俺なら間違いなくミコラに襲いかかっていただろう

そんな事を染々思っていたらミコラが爆弾を投下してきた

「でもコジロウって不思議よね、凄く強いんだなぁと思ったら実は田舎育ちで何もしらないし……それにそのローブも何処で手に入れたの？あとなんであの森にいたの？名前も変わってるし」立て続けにぶつけられる質問

どれもこれもまだ本当の事は言えない

せめて俺がこの世界に馴染むまでは隠さないと

（その為には今のこの試練を乗り越えないと）

だが今度の試練はあまりにも難易度が高かった

（大丈夫だ小次郎……お前ならやれる……今までだってそうだった筈だ！）

まずはミコラが今思い出してしまっているあの時の俺への怯えを取らないと

（久々ではしゃぎすぎたからな…）

「質問には一つずつ答えるよ。まず俺の故郷は訳あって言えないんだ、ごめん……それとなこのローブは俺の村の正装なんだ、俺達は成人するとこのローブをもらえる。そして男の村人が成人するためにはその村の長と戦って認められなければならない、だから俺達若い男達は小さい頃から肉体を鍛え、心を鍛える為に家畜を殺したり猟にでたりする」

そこで一息付きまた話す

「名前は字を先に持ってくるのが当たり前だったからなぁ、俺はそんなに違和感はないんだけどね。最後になんであそこにいたかと言うとね、分かんないんだ」

（ここまでは完璧だ……大丈夫だぞ小次郎）

ここまで話しミコラを待つ

「なるほど……だからあんなに冷徹に戦えた訳ね……でもそのローブって村の人達全員がきてるの？」

（馬鹿みたいに信じるんだね。それとも演技かこの野郎め）

ていうかそんなにローブが気になるか

「あぁなんたって村の正装だからな、老若男女違わず着てるよ。何か可笑しいかな？」

（役者になろうかな真剣に）

「可笑しいも何もあの夜叉のローブと一緒の物なのよ！可笑しすぎるわ！それに分からないって……失礼を承知で言うけど怪しすぎるわよ貴方」

なん……だと？

見破られたか？

何故だ！俺の猫かぶりは完璧だった筈だぞ！

糞が！やっぱり情報も何もないのに無茶だったか

（焦るな……焦れば死あるのみ……）

まだだ…まだ取り替「ここまで聞いたからもう最後まで聞かせて貰

うわ。……貴方一体何者なの？この大陸で身分証が無いなんてあり得ないのよ、それに見たこともない黒い髪に黒い目…命を助けて貰ったのは本当に感謝してる、でも流石に怪しすぎるのよ貴方」

終わったか…

まぁ結果はどうであれ何時かはばれてたんだ

遅いか早いかの違いだ

…ちょっと早すぎる気もするけど

（ここでどうするか？出来れば殺したくはない……夜叉との事も有るわけだし）

それに夜叉は言ったんだ

――側から離れるなと、何が何でも守れと――

馬鹿な俺でも分かる事は分かる

ミコラは普通じゃないだろう

この世界の基本や治安は知らないが、武装した男共に追われていたんだ

訳ありなんだろう、しかも何か嫌な予感もする

そんな奴を守れと言ったんだ、この大陸の為に生きてるあの夜叉がだ

（伊達に修羅場は抜けてないですから）

そこまで考えたんならやる事は一つだろう

黙っていた俺に警戒したのかミコラが後退り、逃げれる体勢に移る

「確かに怪しすぎるよな俺は」

いつもの俺の話し方、口調に戻しながら俺は

――槍を引き抜いた――

■■said out■■

■■said ミコラ■■

「確かに怪しすぎるよな俺は」

と言いながらコジロウが槍を引き抜いた

今のコジロウが本当のコジロウなんだろう

口調が変わる

あの時は確かに混乱もしていたし、冷静じゃ無かった

だから違和感に気付いた事に気付けなかった

（やっぱりね……）

この男は怪しすぎる
身なりも雰囲気も何もかもが
一緒に歩いている時に冷静になり良く考えてみた
まず身分証が無いなんてあり得ない
何故なら
ミシュガインで産まれた者は皆その家の血統図に自動的に名を刻まれる
どれだけ貧しくても必ず、誰でもだ
そして赤ん坊の頃に首の後ろに血統図によって刻まれる文様が、自分の生まれと家を示す身分証になる
文様は産まれた国のシンボルになる
もし血統図が無くなった場合や、文様が消えた場合は直ぐに国から新しい文様をもらう
国の王には代々特別な血統図が残されており、その国全ての者の名を刻んだ正に国の母となる血統図
それにより、血統図や文様を無くした者でも自分の名前が本当で有るなら再び身分証を持てる
だから身分証がない奴は意図的に消している罪人以外あり得ない

（あの時の姿がこいつの本性なのね）
アガレスを殺す程の罪人なのだ
私なんか一瞬で死ぬだろう
でも何で直ぐに殺さないのか？
（理由なんて沢山あるじゃない…それにどうだっていいわ）
今更考えたって遅い
（ちょっとだけこいつの事好きになってたんだけどなぁ）
初めて出来た友達だと思っていた
（馬鹿な私への罰かしら？）
でもまだ死ねない
セシアの民に伝えなければ
ダウンの思惑を、あいつの侵略を
死ぬのはその後だ
（だから最後まで足掻くわよ）
「へぇ…それが本当の姿なのね、今までは猫かぶりしてたのかしら？目的はなに？もしかして体だったりする？」

時間を稼ぐ為話し掛ける

「……」

だが何も喋らず、遂に槍を動かし始める

（くっ！こいつの速さは尋常じゃない！逃げれない！）

何とかしないと

（駄目っ……もう何も思い付かない）

今までの疲れが一気に迫ってきた

考えるのもままならず、体も鉛の様に重い

本当にこれで終わりね

また涙が溢れそうになるが堪える

せめて最後は気高く……

（私は最後まで自分の事しか）

最後まで自己嫌悪

そして

――目の前の男が槍を――

（さよなら……）

――遠くに投げ捨てた――

「何を勘違いしてるが分からねぇがはっきりこれだけは言わせて貰う」

理解が追い付かない

「俺はお前の敵ではない……俺はお前の味方だ……」

今なんて

「なん……で」

「ミコラ落ち着いて聞いてくれるか？」

コジロウが今までで一番優しい声で話し掛けてくる

（どういう）

とりあえず落ち着こう

話を聞かないと

「改めて言うよ。俺はお前の味方だ」

もう涙を我慢出来なかった

「ひっうっぐぅ……うわあああぁぁん！」

内乱が起こってからずっと一人で我慢してた思い

一人で悩み苦しんだ

一番憎い男に飼われ、日々生きてきて

家族も何もかもを奪われて、一人で泣きながら強くなると決めたあの日からずっと我慢してた

一人だった

辛かった

だから人に優しくされるのがこんなにも温かいとは

忘れていた

「何があったのかは俺は分からねぇ……でも聞きもしない……だから全部関係無しに今は一人の女として泣いとけ……それから全部二人で話そうやミコラ…」

嘘でも良かった

だから今だけは貴方の胸で泣かしてください

――――――

「落ち着いたか？」

コジロウが聞いてくる

ちょっと恥ずかしいが答える

「うん…もう大丈夫よありがとう」

出来るだけ笑顔で

それを見てコジロウが全てを話し出す

「まずは全部謝る、本当に申し訳ない」

いきなり謝ってくるコジロウ

「……どういう事か聞かしてくれる？全部」

私は聞く

「あぁ全部話す、だが信じて欲しい、俺は今から嘘は絶対吐かねぇって事を」

私が頷くのと一緒にコジロウが話し出す

それはにわかには信じがたい内容だった

「違う世界からね……それにあの夜叉が……でもそれなら貴方が今生きてるのも納得がいくわ」

はっきり言って胡散臭すぎる

でもコジロウの今の状況から考えるとあり得なくも無い

「まぁ今全部信じろなんて言われても無理だと思うけどよ……でも現に俺はこの世界の事なんか何も知らないし分からないんだ……」

確かに身分証の事もさっきの質問からもそれは分かる

もしかしたら全部嘘で私は騙されているのかもしれない

（だけど信じるって決めたんだから……でも一つだけ絶対に確認しないと）

「貴方が森に現れた理由もその身なりについても概ね納得はいったわ、でもさっき言った味方ってどういう事？……その言いづらいんだけど…あの時の貴方を見てるから……その…」

そう

あの時のコジロウを見てるから、どうにも信じきれない

それにコジロウが始め自分を偽った理由も全ては分からない

「まぁまだ怪しすぎるよな俺は……今ミコラが思ってる通り俺は人殺しだ……」

迷いもなく宣言するコジロウ

「しかも俺は人を殺すことに何の躊躇いも後悔も感じない、それが俺にとって当たり前で必要だからな。俺が生きる為には他人を殺さなきゃならない…この世界に呪いっていう概念があるかは知らない

が俺は生まれつき呪われてる……」人を殺す事はこの世界において珍しい事ではない

何処の国も戦争になれば殺しを認可する

だがやはり人の在り方として同じ人間を殺すのは誰だって嫌だ

それなのにコジロウは何にも感じないという

（呪いは確かに存在するけど、私にもかけられてるし）

確かにこの世界にも暗示や精神操作の呪いは存在する

（ならコジロウは誰かに呪われてるのかしら）

それだとしてもあのやりようは異常だった

「簡単に言うと俺は他人を殺す事で自身を死から守るんだ、そういう呪い、見境も無いし消すことも絶対に出来ない……この世界には無い呪いだ……この呪いは柳の一族全ての者に受け継がれるからそれが俺にとっては当たり前なんだ……最悪の言い方をすると俺にとって人間を殺す事は家畜を殺すのと同じ事なんだ……」

「なっ家畜と同じですって！貴方それを本気で！」

流石の言いように頭に血が上りコジロウに突っ掛かる

「どう思われようと仕方ないと思う、俺自身も他人事なら嫌悪も軽蔑もする。わかってるんだそんな事はよ…でもなそうしなきゃ生きれねえんだよ俺は！人を殺し食らい自分の糧する！それが俺だ！柳の呪い餓鬼なんだよ！」

今思えばこれが初めてコジロウが私に向けた本当の気持ちなんだろう

（イカれてる…何よその呪い…人を食べるですって！それを糧とする？そんなの）

可笑しい

とは思う

でもコジロウを見る

目の前にはあの時の狂人コジロウではなく、呪いに対しての深い想いを抱く一人の人間

「そんなの……」

「狂ってる。そう狂ってるんだ俺は……お前も見たがな、俺は餓えると自制が効かない……餓えが強い程狂い、腹を満たすため人間を殺す……軽蔑したか？許せないか？」

していないとは言えない

でも呪いが本当なら

（私達が豚や牛を食べるのと同じなのかな？……本当なんて質の悪い呪いなのよ）

あまりにも暗い複雑な気持ち

「……もう俺の呪いに付いてはいいだろう……これからが本題になる……さっき言ったが俺は夜叉にこの世界について教えて貰った、その時になこの呪いの基盤である人間に対する餓えを抑えてもらったんだ。だから当分は餓えも来ないし殺人衝動にも駈られる事もない」

「じゃあ今の貴方は……」

「ただ人を殺す事が得意な只の人間だ」

コジロウがやって来た事を全て呪いのせいにするのは絶対に駄目、それは許されない

でも苦しんだんだろう

生まれつきの宿命を受けどうする事も出来ずに過ごす日々

（私と同じなんだろうかコジロウも）

「その夜叉が言ったんだよ……お前から離れるな、何が何でも守り

ぬけって……何でかは知らねぇけど、でもなあの夜叉が言ったんだ。
それに俺も聞かしてもらうぞミコラ……お前も一体何者なんだ？何故追われていた？……何故偽名を使う？」

「っなんで偽名だって」

不意打ちだった

確かに私も怪しいよね

でも何故偽名って分かったのか？

もしかして私の正体を知ってる？嫌でもコジロウは違う世界の

「やっぱり偽名かよ狸女め……ていうか最後まで隠しとうせよ、せめて表情を変えるなって」

やられた

（いや今のは完全に私の間抜けが）

それよりもコジロウが今言った、夜叉の言葉

（何で夜叉が私を？もう！色んな事で頭が混乱するじゃない！）

既に疑う気持ちは無かった

というかもう頭が処理しきれず何処かに飛んでいってる

「よぉしよしよしまずは落ち着けこの野郎、ゆっくりでいいから答えれる事だけ答えててくれ」

コジロウが頭を掴みながら揺らす

「わかったっからっ！やめでっ」

（普通は撫でるでしょ馬鹿！それに女の子の髪に気安く触れちゃ駄目なの！）

なんとか落ち着き一つづつ答える

「そうね……私だけ質問するのも駄目よね……でもごめんなさい……今はまだ話せないの…決して貴方を疑ってる訳じゃないわ！その……これは……」

そうこれは私とあいつの問題

それに幾ら強いコジロウでも流石に国規模ではどうにもならないだろう

助けて貰った恩人にこれ以上迷惑はかけられない

（巻き込んじゃ駄目なの）

そんな私の心の内を全て笑い飛ばす様にコジロウは言った

「なるほどねぇ……まぁいいけどよ…でもなミコラ、俺は何を言われようともお前に付いていくぞ？始めにもいったが俺は何にも知らない別世界の人間だ、今一人になったら号泣しちゃうからな……それにな俺はお前の〝味方〟だって言ったろ？これは確かに夜叉に言われたってのもあるが、そんな事他人様に言われて動くのは俺が許さねぇ、だから今から発表する事を耳の穴をよぉくかっぽじって聞きやがれ」

コジロウは悪戯をする様な顔で私に向けて言ってくれたんだ

私の人生の中で間違いなく一番大切で暖かくて残酷で、一番私を勇気づけてくれた言葉を

「俺はな今のお前が粕ほど気に食わねぇんだよ、大体何なんだお前？自分一人で全て背負ってますみたいな悲劇のヒロインを気取りやがって糞が！てめえ一人じゃ何も出来ねぇんだよ分かるか？現に死にかけてるしな。無力なんだお前は、馬鹿で間抜けっぽいし」

今までの私を全否定するような言葉

そして私が何か言おうとすると話を再開し遮る

「でもなミコラ、無力でも馬鹿でも間抜けでもな出来る簡単な事は

腐る程あるんだぞ……その内の一つがな頼る事なんだよ…同じ間抜けや馬鹿や無力な奴、はたまた優秀で賢くて強い奴に」

もう私は話に飲まれていた

「お前は今その全てを持った人間を目の前にしている、４７３人の全てを奪い持つ、そう俺をだ！俺はこの世界の事なんか知ったこっちゃねぇと考えてる別世界の殺人者な訳だ、はっきり言うぜ関係無いって、知らねぇって、お前が抱えてる問題も事情も〝全部知らねぇ〟ってな！俺の事を心の底から信用しろとは言わねぇ」

既に手遅れだったんだ

「でも少しだけ信用して頼ってみないか？この世界にどれだけお前に味方がいるかは知んないけどよ、そいつらより粕みたいに扱ってくれてもいいし途中で捨ててくれてもいいからよ……その時まで俺を頼ってくれないか？それだけで俺は自分の意思でお前を守りぬけるんだよ……色々偉そうに言ったけどな、決めるのはミコラお前なんだ……流されない様に答えを考えて欲しい、俺は幾らでも待つからよ」

手遅れだったんだろうこの時には

（頼ってもいいの？私が？馬鹿な私が？）

一人で全部やり遂げると決め、無闇に走った八年間

全てを失ったから、信用できる人間なんかいなかった

でも今目の前には、この世界に染まっていない無色の希望がある

（掴んでもいいかな？頼っても、信じても）

この時には答えは出ていた

「わだじには！わだしにはもう〝だれもだよれる人はいばぜん！みがたなんていばぜん！ずべてうばわればじた！あいつに……あの国に！」
だから！

「だがら！無力でばがなわだじにぢからをがじてください！だよらぜてくだばい！」

もう弱い馬鹿な私とはおさらばしよう

悲劇を背負って前が見えなくなるのはもう御仕舞い

これからは何をしてでもやり遂げる！

そう心に誓った

「……貴殿のその願い、祈り、全てをこの柳家現当主ー柳　小次郎が承る……此れからは俺と一緒に成長しようぜミコラ。俺は今日からこの力をお前の為に使うからよ……」

■■said　out■■

この時、柳が自分にうった枷は柳を更に強くし、呪いによる餓えた願望を消し去る剣となったのであった

――4――

■■said　小次郎■■

（めっちゃ臭い事言ってたな俺……）

さっきはつい勢いでミコラに言ってしまったが、今になって羞恥がやって来やがる

（穴があったら突撃自爆したい）

でも同時にそれを上回る程嬉しくもあった

今まで自分の為だけに二十年間生きてきた

幼い頃から爺さんに鍛えられ、何回も死ぬような目に会い一人前と認められたら家から放りだされ友達も恋人もいなかった

親しい人間はいたんだがどいつも表面上の付き合い

何時でも裏切り裏切られるそんな仲

女との経験はあるがたった一夜だけの関係

だから嬉しかった

まだ完全にお互いを信用した訳ではない

でも確実に近付いて関係

俺もミコラも全部を話した訳ではないが、今はそれでいい

先の事なんか分からないしな

「ぐす……すん…ありばどう…ゴジロウ」

（鼻水と涙でぐちゃぐちゃだなこいつ）

先程まで大号泣していたミコラ

相当切羽詰まっていたのだろう

「落ち着いたんなら早く行きましょうよミコラさん」

今は触れないでおこう

何れ分かるときも来る

「ずぴ……よし！聞いてちょうだいコジロウ、私の本当の名前はね」

――ミコラ＝アールグレイ＝セシアっていうの――

この名前を聞いた当時はあまり良く分からず、なっがい名前だなぁなんて思っていた

「どうしたいきなり？」

「ううん、なんか私だけ偽名使うの嫌じゃない！折角これから一緒に行動するんだからちゃんとしとかないと……それにもうすぐ分かると思うから、この名前の本当の意味がね」

（セシア……何か聞いた事がある様な……まぁいいや）

「……そうですか」

「なによその反応！もっと驚いたり喜んだりしなさいよ！」

いやそんなこと言われても

「とりあえず行こうぜ早く、聞きたい事もまだあるしな」

まだまだ先は長い

「んもう！こっちよ！……ホントに何にも分かってないんだから」

（小声でも聞こえるんだよ俺には）

口にだすなよ

ちょっと不安に駈られる俺であった

――――

「……つまりお前はセシアっていう国の訳ありお嬢様で、ある事件によりダウンっていうお前を追っていた奴らの国に拐われ、ある目的の為に逃亡したけど全部ダウンの連中の計画だった訳で、森に逃げたけど捕まり戻されそうな所を俺に助けられたと？」

「大体はそうよ」

なんというか……

（流石に今の会話では全部分からないけども、何となく読めてきた……ていうか本当に間抜けだなこいつ）

この大陸は四つのデカイ国と他の中小様々な国から成っている

それでミコラは四大国であるセシア王国の多分貴族かなんかで、ある事件の最中に同じ四大国であるダウン帝国の奴らに拐われた

それから何年かはダウンで過ごし逃げる機会を伺い、今回ダウンがセシアを侵略する事を知って慌てて逃亡を決めた

（でもそれは）

ダウンの皇帝の計画の内だったのだ

そして予定通りミコラはあの偽闇魔に捕まってた

（ていうかあの闇魔ってそんなに凄かったんだな……でもそれならあの味にも納得がいくな）

そんな奴を殺した俺は間違いなく指名手配されてるだろう

それからもう一つ

「魔法に呪い…魔人に魔獣……そして魔神（マガミ）」

地球には無かったファンタジーな要素

文明は中世の時代を停滞していると

（貴族に王族、奴隷に民階級ねぇ）

まだまだある

（ミコラの名前にセシアって入ってるよな……）

自分の名前に国の名を入れるなんてもう王族以外あり得ないだろう

（ダウンの陰謀……そしてミコラが言ってたな、あいつに全部奪われてと）

予想できるシナリオはもはやミコラにとって最悪の展開

（これは予想を遥かに上回ったな）

だがもう後戻りは出来ない

（するつもりもねぇよ）

とことんまで殺ってやる

（ダウンの粕共よ……俺を敵に回した事を末代まで悔やむがいい）

その前にまずは下地を固めてそれから一つずつ片付けよう

キャラバンポケットへ向かう道中に答えを出す俺だった

「なるほど……て事はまず準備を整えてセシアに向かうんだな」

何故か俺におんぶされているミコラに問い掛ける

「えぇそういう事よ」

何処か眠そうに答えるミコラ

（仕方ないっちゃ仕方ないけど色々面倒くさい）

一晩中走り続けて気も休まる事が無かったのだろう

疲れはてているミコラ

（意外と巨乳なんだな）

背中に当たる柔らかい感触、役得である

（それはいいんだが槍が邪魔なんだよ！）

ミコラを背負った時に邪魔になった槍

だが決して捨てはしない

今は左腰にロープで結び付け、武士の刀みたいにしているんだが如何せん長過ぎて、引き摺る形になっている

（跡をつけたく無いのに……）

まぁ追い付かれても百人や二百人ごときミコラを背負いながらでも壊せる

（魔法かぁ……多分この新しいのが魔力なんだろう）

こっちの兵士達を食った時に入ってきた新しい力

ミコラの話を聞きやっと理解した

（凄い楽しみです！ふへへ）

やっぱり男の子は何時だって憧れるもんだ

そんな事を考えていたら目的地らしき場所が見えてきた

「あれか？」

ミコラに短く聞くが返って来たのは寝息

と「コジロウ…ともだひ」と言う寝言だった

不覚にもときめいた小次郎はどうするか悩む

（起こしたくはないけど俺一人じゃなぁ……とりあえず着いてから決めるか）

そう決意しまた歩き出す

そしてあと八十メートル程まで目的地が迫った時小次郎の異常に鋭い嗅覚と聴覚が何かを感じ取る

（血と汚物の匂い……何かが燃える音）

「鉄火場か？……いや違うな…盗賊あたりか」

中世時代の治安なら可笑しくはないが

（タイミングが悪いんだよ粕が）

今の状況で出くわしたくはない

（ミコラが起きちゃうだろうが！）

なんともくだらない理由でだが

はっきり言って今もまだ行為の最中なんだろうが

（関係ないしな）

非情に思える発言だが一々相手にしてたら時間も体力も勿体無い
だが他の場所まで行くにしても同じだ

（うーん……どうしよう…ちゃちゃっと殺すか？でもミコラが）

ミコラの睡眠と他の人間の命なら迷う事なくミコラの睡眠を選ぶ小次郎

先程からミコラに大しての感情が曖昧になる

嬉しいんだけど切ない気持ち

（恋か！俺にも春が！）

だが状況が状況だ

迂闊には行動できない、と迷っていると聞こえてきた此方に向かってくる六頭の馬の足音

「ちっうざったい」

多分斥候か偵察に来たんだろう

逃げは出来るが

（仕方ない…どうせ全員粕みたいな連中だろうし殺して火事場泥棒するとしよう）

これからの行動を決めた小次郎は自分からも向かっていく

――――

「これはまた豪勢なお出迎えですなチン粕共」

「あん？何か行ったか色男さんよぉ」

俺の回りにいるのは全員男でありお粗末ながらも武装してやがる

（鼠がチーズを加えた所で全く無意味なんだよ）

その全てが錆びている片刃の鞘無し中剣

山賊刀と呼ばれてる粕みたいな武器

「ぎゃはは！おい兄ちゃんよぉ、身ぐるみ全部と後ろに背負ってる女置いて行ったら奴隷として使ってやるぜぇ」

（身の程知らずのゴミが……お前らがどれだけ粕かを教えてやるよ、
お前らの命でな）

あまりミコラに負担をかけない殺し方

簡単な事だ

まず始めに殺気を放ち、その後はただ命令すればいいだけ

だが只の殺気ではない

森羅万象と呼ばれてる殺気をだ
森羅万象（しんらばんしょう）
柳の初代が作りあげた技の一つで、あまりにも危険な為禁忌の書に
書き込まれた最悪の精神破壊攻撃
殺気を受けた者の末路は……

「お前らみたいな粕の為に時間を使いたくないんでな、自分で腹を
切って苦しみながら死んどけ」

小次郎が言った

すると次の瞬間その場は地獄に変わった

「あ、あ、ぁあああぁぁぁあ〝あ〝が！」

「わがわがわがリ〝ゃじだあぁ！」

「お〝れ〝ぼな〝いぞぼぁ！」

正に地獄絵図

男達は自身の腹と乗っていた馬の腹を裂き、死んでいく

場は内蔵や血、汚物でまみれ小次郎が立ち去った後に動く気配は一つも無かった

――――

「うぅん……あれコジロオォどこぉ？」

「はぅあ！」

粕共を始末した後直ぐにミコラが目を覚ますが、寝起き早々とんでもないミサイルを打ち込んできやがった

（ジャベリンよりも威力が高いとは！だが小次郎、落ち着くのだ……悟られてはいけない……恋などしてはいない！）

「小次郎は今貴女を背負い目的地へ向かっておる次第ですぅはい！」

完璧な返しだ……

「ん？あれ？私寝ちゃってた？」

そうだよ天使…じゃなくてミコラ

「あぁぐっすりとな」

「ごめんなさい！私貴方にまた無理を」

嫌々ぶっちゃけ半年ぐらいは象を背負って走り回れるんで

「気にすんなって、疲れてたんだろ？まだ背負っててやるから」

「そんなのだめ！コジロウだって疲れてるでしょ？降りて歩くわ」

何という女神……じゃ無かった天使なんだ

「うーん…いや大丈夫なんだけどな、ちょっとややこしい事になってさ？出来ればこのままの方が動きやすいんだよ」

これは本当だ

……いや実は傷一つつけたくないから俺の側に居てほしいだけなの

「ややこしい事？」

（髪がめっちゃいいにほい……柔らくて温い……それにこの女神ボ

イス……離れたくないんです！貴女はなんでそんなに愛らしいんですか？僕をどうする気ですか？罪すぎるよミコラ……）

今までに無かった感情

これまでは餓えを超える感情は無かったが今は違う

初めて自分から守りたいと思った存在

もどかしいくらい惹かれる気持ち

（俺ってこんなに気色悪かったけ？まぁいいやなんか心地いいし）

「あぁ。実は目的地に盗賊がいるんだよ」

背中で首を傾げてたミコラに向けて言う

「盗賊？！早く助けに行かないと！コジロウ早く行かないと！」

だが大切に想うからこそ言わねばならない事がある

（ミコラなら大丈夫さ）

「行ってどうするんだ？」

「どうするって！助けるに決まってるでしょ！そんな事より早」

「誰が助けるんだ？ミコラか？俺か？相手の方が数は多いんだぜ？それに俺らはセシアに向かうんだろう急ぎで。助けた連中はどうする？最後まで面倒見れんのか、今のお前がよ」

（聞かせろミコラ、お前の覚悟を）

「それはっ！私と貴方で……面倒も……」

話しながらも歩みは止めない、ミコラの答えでいつでも走れる様に

「甘過ぎんだよ、セシアの民も救って、道中の困った奴も救って全部助ける。力無き理想は只の身の程知らずの戯言だ……依存はいらないんだ俺は、共に困難に立ち向かえるそんな奴を求めてるんだよ」

もう少しで着いてしまう

（一言、その一言で俺達はまた前進できるんだミコラ）

「……っ！確かにそうよ！甘過ぎるわよ私は！自分じゃ出来ない事を貴方にやらせようとしてたわ！……ごめんなさい…でも、それでも私は救いたい！甘ったれた戯言を実現できる理想に変えたい！だからコジロウ！一緒に戦って一緒に死んでくれる？」

（流石は俺が惚れた女だ、お前は最高だぜミコラ）

「くくくっ……あぁ任せとけよミコラ、お前の障害は俺が全部壊してやるからよ、お前はただ進んで行け……そしてまた障害が出来たら二人で考えてまた俺が壊しお前を前進させる！なぁミコラ……俺らはまだまだ成長出来るんだぜ」

これが本当の二人三脚だろう

決して依存ではない関係

「うん！私も貴方と一緒に成長して何時かは追い抜いてやるわ！それまで離さないんだからねコジロウ！」

「はぅあ！」

（苦しいのぉ！弄らしぃのぉ！）

今のはヤバかった

まさかプロポーズまでされるとは

「じゃあ早速行くからよ、しっかり捕まっててね」

「うん！離さないから大丈夫よ！」

――そして俺達は共に歩み出した――

■■said out■■

第1話：それぞれの今と状況、そして出会いと別れ。（後書き）

ここまでお読み頂き有り難うございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1623ba/

人間脱退

2012年1月4日02時52分発行